

家庭文化のあり方を考える

高橋 敷

一 はじめに

私が横浜に住んだのは、かつて外国への船出を待った一週間ばかり。だから知っている知識も少ないのに、なぜかなつかしく思うことは多い。ずっと住みついている人が持つ郷愁ではなくて、ふと思いだす町の風物や人情——そこにまつわる個性が横浜を忘れさせないのだから。それが文化というものかもしれない。文化とは、格式だのレベルの問題ではなくて、にじみでる独特の味わい。そんなものが消えてしまっただけで、日本じゅうが同じ町になってしまっただけでつまらない。家庭だって同じことだ。家族がつ

くり上げた文化——実体の定かではない昔の家風なんぞではなくて、交際してもなつかしく思われるような味わいがなくては家庭もまた失格なのである。

二 家庭に文化はあるのか

海外各地での生活が長かった私の家庭では、ときおり外国の友人たちに貰った饂飩の品々を出して彼らをしのぶことがある。
「タカハシ家にはお世話になったねえ。別れの記念には生涯かけた最高の贈りものをしたんだ。受けとってね」

- 一——はじめに
- 二——家庭に文化はあるのか
- 三——大きく変容した家庭の中味
- 四——文化は食卓の団らんから
- 五——お手つだいとバカンス
- 六——開かれた交際へ
- 七——ほんとうの権威をこそ

隣人からこういわれた時などは、「何をくれるのかな。持って帰ることのできる大ききかな」と心配したこともある。だけど貰ってみるとばかばかしい品物ばかり。「たいへん」が金額を表わす私たちの習慣と違って彼らの方はいつも「つくる労力」の大ききであった。してみようと、ボロボロを合わせて編んだ「鍋つかみ」などというものは、金額としての価値こそなくっても、何十時間もかけて模様をおりこんだ「たいへん」な誠意の結晶なのである。花瓶敷き、靴すべり、ハンケチ、スナップ写真……海外の交際になんて、饂飩、お祝い、お見舞い、ときさまざまな贈りものはあるけれど、そのどれもが

家庭の味わいをしっかり盛りこんだ手製の品ばかりだった。それらには、名刺もなければ署名もないけれど、見ればすぐに△△家からのプレゼントだと分かる特長が備わっている。フランス人のラナー家の編み物にはいつも「ししゅう」の縁取りがあったし、オソリオ夫妻の品には、めでたい場合もお見舞いの場合も、いつも色とりどりの縞模様があった。

こんな生活体験をふまえてから日本に住んでみると、実際の贈答もすべてデパートからの商品であり、名刺が貼ってなければ誰からのものか分からないし、金額を推量しなければ感謝のしようもないものがほとんど。向こう三軒両隣りといわれる交際においてさえ、家庭の味わいを感じるような機会はなくなっている。「贈るに物うすく誠厚く」とは、昔の時代すでに上杉鷹山が述べた言葉であるが、家庭の営みのほんの些細な一部でしかない贈りものの世界にさえ、家庭独自の文化といえるものが消えているのが悲しい。

「ご家庭の今年の計画は？」

「お宅の家族の仕事の分担は？」

「家族が休日をごす独特の方法は？」

「今月の子どものしつけ計画は？」

「お宅の交際原則はどんなもの？」

「あなたの家庭の近所へのスローガンは？」

たたみかければこのなかで、即座に答えられるものが幾らあるだろう。もし同じ質問で、あなたの職場について、町について、クラブについて、出身の学校についてなら答えられるというのなら、何という「家庭軽視」であろうか。彼の自治体でやっていることを、家庭でだけは除外してきたところに、私たちの家庭の弱体化は生まれた。

世界に文化国家などと自称する私たちの家庭——たしかにテレビやクーラーはあるかも知れないが、近所に負けぬように食って、寝て、よその子に負けぬように勉強させるだけの社会単位なら、どうして家庭の文化などを語る事ができるだろう。

三——大きく変容した家庭の趣味

ここ百年たらずの間に、家庭という言葉の意味するものは変わってしまった。とくに最近の二十年間に、その違いは大きくなったといえるだろう。

第一に、かつては大家族が普通であった日本の家庭が、昭和三十年代四十年代のうちに急速に核家族化されたことである。たとえ祖父母が同居していたにせよ、もう昔のような「しゃもじ権」のトラブルなどはなくなって、都会の場

合には、ある意味では核家族連合のような様相になったりしている。もっとも、核家族とはいっても員数合わせだけのことで、その実、核家族の考え方は育っていない点はあとに述べねばならないが……。

第二には、あまり気づかれていないけれど、ここ数十年の間に「保護者——被保護者」という階層の分離が家庭におこったことがある。従来から家庭というものは、老幼男女を問わず汗を流して一緒に働いたもの。農家なら、父はクワを振るい母はタネをまくにしても、老人も草をひいたり、幼児もスズメの番をしたりする協力体制があった。これは商業を営む家庭でも、また家内生産を行う工業家庭だって同じだったろう。家庭とは、ともに汗を流し、ともに収穫をあげて、ともに食って行く単位でもあった。だのに気がついてみると、いつの間にか働くだけの親と、働かないで勉強だけすればよい子どもとに分離してしまっていたのである。

第三には、もっと深刻なことだけれど、家族がすっかり分解しているという事実がある。昔から家族というのは、朝起きてから床につく深夜まで、働くときも、食事のときも、二十四時間びったりくっついて離れることのないものだった。眠っているときだって、一つふとんに同じ夢を結ぶのが家族である。だのにここでも、

いつの間にか一人ずつがバラバラになってしまっていたのだ。朝早く出かけると、深夜まで帰らない父親。共働きではないにしても、家では一人ぼっちになる母親。子どもの方は小学校へ行き、戦後は中学校へ、高校へ、さらには幼稚園へ保育所へと通って家庭からは離れてしまふ。核家族化のせいで老人は少ない。その上に、時期わるくバラバラ化の最中にテレビが普及したし、乱塾ブームは、やっと家に帰った子をまた外へと誘いだした。おまけに、こたつに足を入れて家族が一つ部屋に寝る習慣までうすれて、個室に分かれる傾向がつよいとあってはもうお手上げ、かつての家族生活の概念は、今日では大きく変わったといつてよい。

問題はここで、「核」家族になり、分裂した親子になり、バラバラの家族になつても、そこで家庭をどうまとめ、文化圏をどう育てるといふ発想はなく、昔の大家族が二十四時間を一緒にすごしていた当時の気やすさのままに納まっている親の無気力なのである。

だからといって、安易にヨーロッパを真似ればよいというものではない。たとえば私たちのまわりにも、海外の個室をまねて、子ども一人ずつを切り離す家庭がふえている。だけどそれは、個人の主体性や責任感を育てるためではなくて、本来がL・L教室のブース並みに、目か

くして勉強させるつもりだから話にもならない。ヨーロッパの家庭生活では、ゆったりした夕食の団らんをすませて、キスで名残りを惜しんでから個室に別れる。逆に夕食をさっさとすませた日本人は、あとで家族が一つふとんにくまらって眠る寝物語に支えられていた。東も西も人間の生活原理に違いはなく、文明はそれぞれがバランスを保っていたといつてもよい。だのに最近の私たちのように、早く帰ったものから夕食をかきこんで、個室に別れたのでは家庭に何が残るのだろうか。サルまねでなく自分の場での対応策を打ちたてるときは来ている。

四——文化は食卓の団らんから

その場合、家庭文化の育つ条件として眺めるなら、ヨーロッパ流の家庭生活の分析は、私たちに益するところが非常に多い。かつてイギリスのロック卿が、「家庭は城である」といったとおり、彼らにとつての家庭のプライドは、昔の私たちのイエ、あるいは国家をさえ連想させることがある。「今夕、残業してもらえないか」と交渉を持ちかけられた従業者が、「家庭での夕食時間は、そんなに突然に変更できない」とつっぱねている光景ならよく見かけている。こんな家庭の持ち主たちが、私たちよりも

三百年以上も早く産業革命の洗礼を受け、それから押しよせた核家族化、不労働勉強階層の出現、家族のバラバラ化といった激しいうねりを耐えて来たのだから、家族のきずなをしつかり持続する工夫はすでに備わっているといえる。しかも、一人ひとりが個室で過ごす彼らの「寂しさ対策」は、もうとっくにできているはずではないか。

「家庭って何するところなの?」……私は子どもたちにこんなアンケートをとりながら世界を旅行したけれど、最大の答はなんと「おしゃべりするところ」。低学年の子にまずイメー

ジとして浮かぶのは、二時間ばかりもかけて、ゆっくり話しながら食べる夕食(地方によっては昼食)の団らんらしかった。同じように日本の子に連想を求めたら、家庭とは……宿題、テレビが圧倒的多数なのだから救われない。ところで、この団らんの席では、父の一日の活躍ぶりが自慢される。儲けたり、損したり、苦労したり。同じように母親の方にとって、買物の話、近所のこと、家計の見とおしと話題はいくらでもある。こんな中で、子どもたちも負けないで学校のできごとや、友人との話題を提示する。いわば夕食の対話は単なるムードづく

りではなくて、バラバラ化に対処する方法——つまりは一日を各個に離れてすごした家庭のメ

ンバーたちが、お互いの情報を交流して、共通のものとする重要な会合なのである。家庭に文化がおこる原初的な基盤だといってもよいであろう。

ここで、団らんや対話をスムーズに楽しく進めるための司会役として、父親の力量というものは大きい。「何だ。またいつもと同じお菜か。ちょっとはましなものを食わせろ」という不平よりは、「おや、またこの間のうまいやつだぞ。」という方が楽しいに決まっている。円満な家庭の司会者というものは、まずい夕食の席でも何とか工夫して座を保つものらしい。

「やや、これはビタミンAだ。おう、Bもある。Cもあるぞ。今夜はみんな大きくなるんじゃないかな」

こんな気のきいたリードを受ける家族は、みんなが協力して雰囲気盛り上げるようになるものだ。説教や叱言は別のときにして、少しでも子どもに話させ、上手に聞いてやること。また子どもの方だって、学校で何かがあれば、家族の前で話してやろうとメモをして帰るほどになれば、もう万々歳である。それにしても、昔の寝物語や、夕食後の茶のみ話といった日本的交流が消えてしまった今日の家庭は、何と寂しくなったものだろう。

ところで、昨年一年間、私が読売新聞に「家

庭って何？」を連載していた当時、そのバック・アップとして同社が全国から集めてくれたおしゃべり時間の集計結果は、親子一組あたり「一日三分間」との答えだった。そして、家族そろっての夕食(約二十分間)はやっと週に一回、しかも司会役の父親は家庭に寄りつかないというのなら、文化なんぞ育つべくもないので当然のことだろう。

五——お手つだいとバカンス

子どもを被保護者と決めてしまわないための工夫に、家事の分担がある。

「ボクはお客のサービ係なんだ。スリッパのことも、コーヒーのことも何でもボクに尋ねてね」

国の文化の高い低いに関係なく、世界のいたるところで聞かされた子どもの歓迎のことば。ついでにいえば、ボクの係に並ぶババの仕事は会社で働いて給料を持って帰ることであつたり、郵便を配達することである。ママが買物にでかけるのも、今月の予算を考えるのも、また同じ。一日に一度あるなしの仕事ではあつても、やはり堂々たる一部の担当責任者。執行(?)中「は保護者同格なのである。この点が、単に父や母の依頼によってする応援や下働

きの、いわゆるお手つだいとは意味が違っている。

普通、子どもが担当している仕事は、自分の部屋やコーナーの管理のほか、中学生なら家具の修理係や、庭の掃除、雨戸や窓の管理、おやつ係など。小さい子も、小鳥のエサ係、時計の管理、お客のサービ担当など。根拠をいえば独立自治体である家庭が、毎日正常に運営されて行くための業務分析にもとづいている。

「うちの家が動いて行くのには、仕事が一〇ばかりあることになるな。四人でこれだけを消化しなくてはならない。なかなかたいへんだぞ」

「でもお前たち、今は学校があるから大部分はパパとママがするわ。戸じまり役とお客さん役だけはお前にたのむことにしようね。さあ、これで安心だ」

たったそれだけのこと。下請けでない担当責任者というだけで、子どもも親とともに、家庭の建設に参加するメンバーの一人となつてしまう。ここでは、親は保護者ではなくて指導者。立派に自分の担当をこなしながら、子どもの見本となつてやれる人生の先達でなければならぬ。

共通の目標に向かって進む集団としての家庭には、もう一つ、一緒に汗を流して共同作業をするという、昔の田畑の仕事を思いださせる面

だつてなくては寂しい。分担と並んで、共同作業もまた組み入りたい家庭プランの柱であろうか。

ヨーロッパに学校がはやり始めたとき、夏休みを設けたのは年に一度の小麦の収穫期に合わせたものであった。忘れられたとはいえ世界のあらゆる地域で、家業のある家庭では今日も条件はある程度守られている。幸か不幸かサラリーマン稼業になった家庭でも、この伝統は受け継がれて、夏休みになれば家族が一緒に汗を流す「菜園の手入れ」や「家屋の修理」が待ち構えているのだ。そんな菜園もなく、修理する持ち家もない団地族は、やむを得ずみんな揃って夏の旅にでる。旅は決してホテルに泊ったり、レストランを利用するぜいたくなものではない。家族みんなでテントを張り、水をくみ、たきを集めて食事の準備をする。いわば家族の共同作業の一種として家族旅行も利用されている面を見逃してはならない。一日のバラバラ生活をとめるのが夕食の団らんなら、一年のバラバラ生活を、たとえ数週間でも家庭の権威と主体性のもとに返すのがバカンスなのであり、またバカンスは、本来の家庭を思いだすチャンスだといってもよいだろう。

してみると最近の私たちは、長い間、職場や学校に遠慮ばかりしているうちに、家庭の主体

性どころか、本能までもマヒしてしまつたのではあるまいか。「さあ、明日からは一年ぶりで家族が自分の計画で生活できる」と世界の人たちが手をたたいて喜ぶ夏休み。私たちにはあまり期待はない。

「ああ、困つたわ。毎日みんなごろごろして、早く学校が始まってくれたら」

どこの家庭でも聞く母親のグチ。家庭が家庭に近づくせつかくのチャンスなのに。いつの間にかバラバラの生活が本体になってしまつて、個々の文化をつくる意欲などは忘れているのだろうか。おしゃべり会でもいい、ゲーム大会でもいい、いや、家族の自慢料理コンクールでもよい。地方の友人一家との一日家屋交換もおもしろい。せめて今年の夏くらい、三日か四日も家庭に権威のあることを確かめてみよう。

六——開かれた交際へ

家族が大家族でなつていた時代、私たちは嫁姑の關係や、お互いの親戚づきあいを通じて、まがりなりにも社会的能力を育て上げてきた。しかし、今日のように核家族ばかりになつた都会の生活では、近隣社会との交流を忘れては、とても子どもに社会性を育てることにはなれないではないか。「しきいをまたげば七人の

敵がいる」のが大家族時代の教訓だとすれば、核家族同士の交際は、「家庭は社会を教える学校だ」とするJ・ルソーの原理でなくてはならないだろう。

「外国人はよその子も叱ってくれる」とは、私たちの反省としてよくいわれることであるし、また近隣の夫婦や家族が、お互いに引き合つて「おしゃべり」したり会食したり、一緒にピクニックにでかけることも、あまり私たちに経験のないことだ。核家族の生き方では、かつての家族内交際や親戚づきあい、近隣の助け合いになつていゝ面を見落としてはなるまい。大家族が分裂すれば核になるというものではない。

ユニークな文化を育てる家庭のメンバーは、一人ひとりがまた個性を豊かに持った個人でなくてはなるまい。自分の文化をつくり上げる根拠地は、個室であつたり、自分のコーナーであつたり、また自分の机や戸棚であつたりする。

住宅事情のよくない日本の場合、なかなか個室とまではいかないけれど、それを目標としてあげられていることは間違いない。ただ、私たちのあこがれる個室とは（核家族生活に慣れた）外国人にとって何ものであるかは、よくよく確認しておく必要がある。

第一に、日本の家屋と彼らのそれとは原理に

おいて大きい差があったこと。家屋の大きさは、オランダやベルギーのような小さい国もあるから決して日本は狭いとはいえないけれど、個室が中心で共通の部屋はサロンだけという彼らと、どの部屋もみんな利用できる私たちとの違いは大きい。つまり、自分の部屋だけでは自由だけれど、サロンにでるときは少しばかり「よそ行き」の構えが必要なが彼らであり、家の中ならどこでも裸でいる権利(?)があったのが私たちだといってもよい。

第二に、個室で自由を持つ彼ら一人ずつは、子どもだって自分の部屋は自分で管理することが必要であった。もちろん、そのためには個室に入れる幼児期から、掃除、整理などはきびしく仕込まれており、自分の個室の管理は生きていく条件として果たされなくては自由も守れない。この点、家の中でも自由であり、紙を捨てても、ミカンの皮を放りだしても母親が片づけてくれる日本の環境とは本質的な違いがある。私たちが子に、個室とか、机とかを与えても、それがこれだけの責任にこながせているとは思えないからだ。そればかりか単なる「せいなく」所有で、汚れたら母が掃除に行く。

第三に、自分の場所の文化は自分でつくって行くという(私たちとは逆の)面も考えてみたい。個室を持たせる習慣の国民の場合は、子ども

もが親から離れて独り寝を始めるのは就学以前だから、人格が形成される間を通じて個室という「第二のゆりかご」に居ることとなる。その間に、何一つない部屋に手を加え、努力をかけての創造と建設がある。財産といえど粗末なベッド一つしかなかった部屋が、二十年の後は、女の子なら人形を飾ったり、男の子ならさまざまなミニ・モデルなどをちりばめた、個性あふれる青春の宮殿となって行く。私たちに欠けるのはそのプロセスだろう。(最初にたとえれば部屋を与えるときに)もう机もいすも完備され、電気エンピツ削りまで揃っているとあっては、どうしようもないではないか。子に育つのは、古くなっていく不満と干渉への依存ばかりとなってしまう。

第四に、これらを総合しての個室から社会への流れがある。ここでは、何といっても家庭に一つしかない共通の部屋として、狭くともサロン(居間、応接、玄関、食堂、遊び場など全てを兼ねている場合が多い)の意味を評価せねばなるまい。個室で自分の文化と責任を体験した子は、家族文化をつくるサロンというミニ社会では、一応の社会人を経験する。服装にもふしだらには許されないし、紙くずを捨てることもかなわぬ。また、外部からみればサロンまでは、近隣の人々や親しい仲間たちは、遠慮なく

入ってきてお茶をのんだり話したりして帰って行ってよいところである。いわば二重の意味で社会を経験した子どもたちが、最終の段階として外にでるということになる。私たちの場合には、残念ながらこの流れがみんな欠落している。自由とふしだらはあって責任さえもない状態から、いきなり外部へ出て行くのだから危険きわまりない。公德心がなくなるとか、社会性に弱いなどという批判はやさしいが、むしろ、構造的に考えると「よくやっている方」かも知れない。もっとも、核家族ばかりになったから矛盾も吹きでたわけで、何世帯、何世帯もが一つの単位として生活していた過去にあっては、そんな流れはなくても人格の形成に不便はなかったろう。

それにしても、くどいようだけれど心配なのは日本のサルまね個室化。しつけのためのものが、世話を受けるホテル暮らしになり、文化をつくるはずが、完成品支給の個性退化になり、生きる力をつける道が、つながりのない孤立を生みだしている。

七——ほんとうの権威をこそ

「タカハシさん、明日はわが家のピクニックですが、もし予定が他にないなら一緒にきませ

んか」

北欧で、南欧で、また広大な南アメリカで、単身の当時や夫婦二人きりの時代には、しばしば近隣の人たちや職場の仲間たちのパーティーにくっついて出かけた。

そんなとき、行き先はきまって「わが家でみつけた」景勝の地。名所でも何でもない郊外の丘や浜辺や森の中に、家族行きつけの空間があるのだった。そして、持って来た弁当やおやつをバクつきながら、客人も含めて一日の家族プログラムは展開される。スポーツがある。合唱や演奏がある。一人ずつの新しい歌の披露がある。手品がある。お話大会がある。私たちが行う職場の忘年会さながらに、何週間もの間、それぞれの家族メンバーがこの日の「いいかっこ」のために見つけておいた題材が交換され、家族のリズムが合奏されるのである。「家庭の文化ってこんなものかな？」と、ただ何の脈絡もないながら、肌身で感じた体験は、先進国でも、低開発国といわれるところでも変わりはない。確かに、親だから子を殴りつけて従わせたり、

結婚を強制できた古い権威なら消えたかも知れない。だけど、ほんとの親の権威、夫婦の権威とは、日々の生活を通じて、見通しや、計画や、ルールや、スローガンを具体化していくこと。贈りものや、分担や、行事や、団らんや、交際を通じて、「わが家の文化」を育てて行くことだろう。してみると、私たちに権威が失われたのではなくて、まだ権威は何であるかに気づいていないのかも知れない。親の権威はこれから生まれるのだといってもよいだろう。

私たちは忙しかった。とくに家庭の主婦は忙しかった。外国の主婦たちが、半日で一週間分の家事をすませ、三十分で家族の食事を準備しているときに、日本の主婦は夜なべに夜なべをついで、なお時間の不足にあえいだものである。だげこれも、パン食と、たきを燃やしたり米をといでの食事。タタミと石の建物。二週間もシャツを着がえないですむ空気と日本の湿度などを較べてみればやむを得ないことだった。この条件の有利さから、彼ら欧米人たちは私たちより早くから余暇を持ち、家庭文化を育て、交際の華やかな家庭をつくり上げたとしても、その結果として女性の立場が強いものであったとしても、私たちとしてはやむを得ぬハンディキャップでもあった。だげ今や、私たちの条件はすっかり変わってしまったのだ。主食こそ

米であってもガスがある。洗濯機もあればクーラーもある。長い間、どうしても西欧に追いつけなかった生活の不利は、科学技術の力を持って克服したといえるだろう。もちろん、家事ばかりでなく労働者の勤務条件だって、八時間労働から七時間労働へ、週休二日制へ、有給休暇二十日制へと、昔と比べればどんなにか有利になってきたことだろう。科学技術は進んでも「家庭文化の後進国」であった私たちの国にも、町々にも、今こそ彼らと同等、あるいはそれ以上の条件はととのったのだ。

男性よ、社用のゴルフや職場のつき合いはほどほどにして、家庭という自治体を見なおそう。女性よ、子どもの学習にばかり余裕の時間とエネルギーを費さないで、しっかりと家庭の文化を振りかえってみよう。団らん、ピクニック、バカンス、分担、共同作業、家庭の行事、計画表、そして夫婦のデートと共同しつけ作戦、近所との家族交際や家庭のスローガン——今こそ私たちにも新しい家庭をつくる時代は来たのだ。マイ・ホーム主義とは、家庭「国」の独立を主張し、ユニークな文化を築く雄々しくも勇気ある生活態度のこと。俗間に誤解されているように、家族だけがこそと秘密の楽しみをしたり、金さためするような生き方ではない。〈教育評論家〉